

フェロシルトの六価クロム問題 製造段階で発生か

岐阜大教授、実験で確認

自然界での変化に否定的

埋め戻し材「フェロシルト」の使用箇所が六価クロムなどの重金属で汚染された問題で、岐阜大学地域科学部の粕谷志郎教授が十五日、岐阜市柳戸の同大学で開かれた研究会で、フェロシルトの製造過程をモデル化した状態から、六価クロムが生成できるという実験結果を報告した。粕谷教授は「汚染はフェロシルトの製造段階で発生したのでは」と因果関係を指摘した。



フェロシルト問題で六価クロムの生成について話す粕谷志郎教授＝岐阜市柳戸、岐阜大学

フェロシルトを使用した県内の複数の造成地では、環境基準を超える六価クロムが検出されたが、原因は分かっていない。フェロシルトは、酸化チタンを生成する過程で発生する廃硫酸を再利用した製品のため、実験では、廃硫酸が生じる過程を代替物を使って再現したところ、六価クロムが生成されたことを確認した。

粕谷教授は「六価クロムは廃硫酸の段階で既に発生している可能性が高い。リユースは大事なことでだが、安全だと言いつ

れるまでは使うべきではない」と指摘。製造元の石原産業(本社・大阪市)側に「フェロシルトに含まれる三価クロムが土中で六価クロムに変わる」という見方もあったが「三

価クロムは強力な酸化作用がない限りは、自然界において、簡単には六価クロムには変わらない。

流通後に汚染されること以上。同社は全量回収の考えにくい」と話した。方針を示し、作業を進め県内でのフェロシルト使用は十カ所計三万ト量は約七十万トに上る。